

「フーン、天神山の森の中……、扱ては狐であつたか、例へ狐にもせよ、三年間添ひ遂げ、子まで成したる其の中おば、古巢へ歸るとは、俺は兎も角、此の子が不憫と思わぬか、飽まで連れ歸らずに置くべきか、お常やーい、お常やーい」

芝居で致しますと、芦屋道満大内鑑、葛の葉の子別れ。落語で遣りますと、貸屋道樂大裏長家、ぐすの嬢の子はつたらかし、保平さんが氣が狂ひまして、馳け出します。出囃子になつて、紫の八巻で保名狂亂を踊りますが、松鶴は、能う踊りまへん。

「お常やーい、お常やーい」

「オイ、清やん、保さんが氣狂ひになつたがな」

「お前がコンと言ふた依つてに、此様騒動が出来たんや」

「今更そんな事を言ふても仕事がない、保さん、何處へ行たんやろう」

「ほつとく譯に不可ん、探しに行かう」

「探しに行くにも、腰が抜けてるので、立つ事が出来ん」

「俺も抜けてるね」

「おかげで、また抜けた」

「コレ、御伊勢詣り見たいに言ふてる、兩人人で一緒に立とう、宜いか、一イニウの三ツ、さあ立つ

た、探しに行かう」

「何處へ探しに行くね」

「私の考へでは、寺町の叔父さん處へでも行たのやないかと思ふね」

「お前、叔父さんの宅を知つてるか」

「フム、花屋を仕てる、一遍行て見やう、早うおいで」

と兩人が、やつて参りましたのが、寺町の花屋で、保平の叔父さんと言ふのが、年齢の頃は六十五六で、禿頭の、ブツテリ太つた、柔和な人、丁度表の床几へ腰を掛けて、一服して居りますが、鐵挺聲で、聞こへまへん。

「オイ、此處や、幸ひ表に居る、へい、今日は」

「ハイ、お出でなされ」

「モシ、あんた處へ保さんは、來まへんだか」

「サイナ、甚い好い天氣になつたなア」

「保さんは、來まへんか」

「私しか、今歳、六十五ぢや」

「違ふ、年やない、保さんや」